研究について

（１） 研究主題

自ら学び、関わり、表現する子どもを育てる指導の在り方 **低：児童が楽しみながら英語や異文化に触れることのできる英語科の授業づくり** **高：自ら課題を見いだし、関わり合いながら、課題を探求する社会科の授業づくり**

（２） 主題設定の理由

① 学校教育目標から

本校では、学校教育目標を「自らの可能性に挑戦する、活力あふれる木下っ子の育成」としている。そして目指す児童像を以下のように設定している。

・進んで学び、考え、表現する子　～確かな学力～

・思いやりのあるやさしい子　～豊かな心～

・丈夫でたくましい子　～健やかな体～

そこで、学習に意欲的に取り組み、学習内容を的確に捉え、自分の考えをもち、表現することのできる児童の育成を目指している。確かな学力を身に付けることで、これまで以上に自らの可能性に挑戦する意欲が高めることができると考える。

② 児童の実態から

本校は利根川の南側に位置し、豊かな自然に囲まれている。古くは江戸時代から木下河岸により栄えた土地のため、各地にその名残がある。最近は、新しい住宅が立ち並び、古いものと新しいものとが混在している地域である。子ども達は明るく素直で、何事にもまっすぐに取り組む姿勢が見られる。家庭環境が複雑な家庭もあり、家庭学習が十分ではない児童もいる。

数年かけて学校全体の学習規律が整ってきており、外国語・外国語活動においても、熱心に取り組み、９割近くの児童が好んで学習している。「ゲームが楽しい」「友達と話すことが楽しい」「ペアやグループで話すことが好き」といった友達とのコミュニケーションに喜びを感じている児童が多い。また、「外国のことを知るのが楽しい」といった、外国に興味・関心をもちながら学習に臨んでいる児童も半数いる。しかしその一方で、「自信がない」「発表するのが苦手」といった自分の考えを表現することを苦手としている児童もいる。

社会科においては、今後実態調査を行っていく。本主題では、児童の生活と社会的事象の共通点や違いから問題を見いだす。そして、その問題について、自分に合った学習方法を選択することで、充実感のある活動や学習にするためにはどのような手立てが有効であるかを考え、本主題を設定した。

（３） 目指す児童像

〇誰とでも、英語を使って自信をもって自分の気持ちや考えを伝えることができる子ども。

〇自ら学習方法を選択することで、個別最適な学びを実践することができる子ども。

（４） 研究仮説

仮説１　児童が進んで取り組めるような言語活動を工夫すれば、自信をもって誰とでもコミュニケーションが図れるようになるだろう。

仮説２　児童が進んで取り組める学習環境を工夫すれば、自分に合った学習方法を実践したり、協力して問題解決をしたりすることができるだろう。

（５） 研究の方法・内容

① 具体的な手立て

＜英語科＞

○低学年ブロックの授業の流し方…年計から、英語コーディネーターの先生と相談。

○言語活動の効果的な在り方

興味や関心をもつ内容…身の回りにある題材、イメージしやすいもの

たくさんの語彙や表現に触れる…多くのことを聞き、多くのことを話す

聞く時間と話す回数を計算した活動にする。

教材・教具の工夫…バーチャルなものや具体物（本物の果物など）

デモンストレーションを重視…モデルを示す

○全学年での共通事項

・英語を楽しくするために　　スマイル・クリアボイス（はっきりとした声）

ジェスチャー・アイコンタクト

・クラスルームイングリッシュ…木下小ならではのものにする。

・１時間の始め（あいさつ・天気・曜日など）と終わり（ジャンケン）を統一する。

○校内の言語環境の整備…語彙を増やすための取り組み（英語コーナー）

○ICT の活用

＜社会科＞

○進んで取り組める学習環境の工夫

・自分自身や自分の生活と、社会的事象との関わりを意識した単元の導入をする。

…資料の提示方法、掲示物の活用、発問の工夫、単元のゴールを明確にする　等

・日々の学習から、「つかむ」→「調べる」→「まとめる」→（「広げる」）のサイクルを行い、定着を図るようにする。

○「調べる」の学習方法

・教科書の内容を読み取る→資料集を読み取る→（インターネットで調べる）

・校外学習で調べ学習を行う。

○思考ツールの活用

○ICT の活用

② 具体的な方法

・理論研修と授業研修をする。

・学年またはブロックで教材研究を行い、ブロックで指導案検討や教具作りをする。
英語コーディネーターの協力を得る。

・授業研は年３回（６月・１１月・１月）

・児童の実態や変容を把握するために、アンケート調査をする。

・年度末に「研究のまとめ」を作成し、次年度につなげる。印刷・製本は学校で。

③ 検証の方法

・児童の様子・発表への取り組みをみる。

・評価についても研修をすすめていく。

（６） 研究組織

校長
│
教頭
│
研究推進委員会
（校長・教頭・教務・研究主任・研究副主任・英語科主任）
│
全体会
│
「英語科ブロック」: 英語科（１・２年　英語科主任　専科　特別支援１人）
「社会科ブロック」: 社会科授業実践（４・５・６年　特別支援）